

GT法の分析的ポテンシャル

著者	水野 節夫
雑誌名	社会志林
巻	52
号	3
ページ	47-75
発行年	2005-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015359

GT 法の分析的ポテンシャル¹⁾

水 野 節 夫

目 次

1. はじめに：
2. Alvesson ら (2000) による GT 法に関する議論と批判の紹介：
3. GT 法の分析的ポテンシャルを引き出してくるための着目点：
 - 3.1. 7つの着目点と3つの検討テーマ：
 - 3.2. (A) GT 法は帰納的アプローチ (inductive approach) なのか：
 - 3.3. (B) 《概念/指標 (concept/indicator)》モデルのありうる意味をどう考えるか (その1)：
概念と指標とをつなげる発想について；
 - 3.4. (B) 《概念/指標 (concept/indicator)》モデルのありうる意味をどう考えるか (その2)：
C. S. Peirce のアブダクションの論理の検討；
 - 3.4.1. アブダクションの例示と定義：
 - 3.4.2. アブダクションの論理—その3つの解釈の仕方について：
 - 3.4.3. アブダクションについてのぼくの立場：仮説的に提示される‘結晶化’的認識としての
アブダクションという把握；
 - 3.4.4. GT の論理との接続可能性：
 - 3.4.5. ここでの主張とその理由：
 - 3.5. (C) コード化枠組みをどう位置づけ、どう生かすか：
4. 終わりに：

1. はじめに：

Grounded Theory Approach (以下、GT もしくは GT 法と略記) の分析的ポテンシャルはどういったところにあるのか。ここで考えてみたいのは、この問いである。

1990年の *Basics of Qualitative Research* (第1版) 出版以来、とりわけ英語圏での社会調査論の領域において質的データ分析の手法としてのGTの存在が大きくクローズアップされていく中で²⁾、さまざまなGT論/GT理解が蔓延することになった³⁾。その結果、GT法という言い方でどういった内容のことを理解すべきか、といった点をめぐってさまざまな見解が乱立することになり、GT理解・活用のポイントが見えにくくなっている状況が続いているように思う。

ぼく自身は、事例媒介的アプローチ (Case Mediated Approach) でのデータ分析を行なっているので、CM派と言っていい立場にある者だが⁴⁾、GT法とは *The Discovery of Grounded Theory* (1967) の翻訳 (1996) だけではなく、それ以前から質的データの分析訓練という脈絡で——GT

の共同開発者の一人である A. Strauss 氏との交流も含めて——それなりに長いつきあいを重ねており、そうした経験を通じて、GT 法は、素材（＝データ候補）群やデータ群の分析局面で、とりわけその能力を発揮できるだけの可能性＝ポテンシャルを持っているという判断をしている⁵⁾。つまり、質的データの分析手法としての GT を高く評価する立場にあるわけだが、GT の分析的ポテンシャルを引き出してくるためには、どういった GT バージョンを構想することが必要なのか、GT の論理のどういったところに着目すべきなのか、といった点について——要するに、GT の分析的ポテンシャルはどこにあるのか、という点について——ぼくなりの見解を提示することが、GT 理解が混沌としてきている現状においては、それなりに意義があると考えている。

ここでは、その問いに答えるために、次の順序で話を進めていくことにする。

まず初めに、M. Alvesson and K. Skoeldberg, 2000, *Reflexive Methodology: New Vistas for Qualitative Research*, Sage. の中で提起されている GT 批判の論点を紹介する形で、GT がどういった問題を抱え込んでいると見られているか、という点に言及する（→〈2.〉）。次に、そこでの議論検討を踏まえて、GT 法の分析的ポテンシャルを引き出してくるための着目点を 7 つ提示した後、本稿で検討の俎上にのせてみたいトピックを 3 つに絞り込む（→〈3.1.〉）。それらは、(A) GT 法は帰納的アプローチ（inductive approach）なのか（→〈3.2.〉）、(B) 《概念/指標（concept/indicator）》モデルのありうる意味をどう考えるか（→〈3.3.〉と〈3.4.〉）、(C) コード化枠組みをどう位置づけ、どう生かすか（→〈3.5.〉）、の 3 つである。これらはいずれも、本稿の主題である GT ポテンシャルの問題を考える上では欠かすことができないトピックと判断しているものだが、とりわけ (B) については、C. S. Peirce のアブダクション（abduction）論を取っ掛かりにして、かなり踏み込んだ議論をするつもりである（→〈3.4.〉）。最後に小活的に GT ポテンシャル絡みの要点について簡単に触れることにする（→〈4.〉）。

2. Alvesson ら（2000）による GT 法に関する議論と批判の紹介：

ここで紹介する Alvesson ら（2000）の議論というのは、より具体的には、その著作の第 2 章（〈2 Data-oriented methods: empiricist techniques and procedures〉（pp.12-51））内の GT セクションでの議論のことである。

ここで注目するのは、

(い) GT は帰納的アプローチ（inductive approach）か？

(ろ) GT は月並みなカテゴリーを生み出してしまうだけではないか、という問題、それから

(は) ストラウス氏らが提起しているコード化枠組み（coding paradigm）についての批判的論評の 3 つである。

まず (い) の、GT は帰納的アプローチかという問題から。これは、素材群やデータ群を相手にしながら〈カテゴリー析出〉へとつなげていく際の作業モードの特徴をどう定式化・把握するか、という問題で、経験的水準から概念を創出してくる概念化作用の基本的特質を考えていく上ではき

ちゃんと押さえておくべき重要な論点である。

それではアルヴェッソンらの言い回しから見ておこう。彼らの議論の中には「GTはデータから引き出されてくる（‘derived from data’）ものなので、その理論は、帰納的に展開されるものである」（p.16）というくだりが見受けられる。こうした理解、つまり、GTは帰納的アプローチである、という理解・認識は彼らだけではなく、例えば、Wengraf（2001: p.2）での「常識的な仮説＝帰納主義的モデル（Common-sense Hypothetico-inductivist Model）」というGTの位置づけ方や、巻末の用語説明のセクションでGTを「オープン・コード化、軸足コード化、選択コード化を伴う、質的データの分析への帰納的接近法」と定義しているGray（2004: p.399）、「グラウンデッド・セオリーと関連のある帰納のプロセス」というGTの位置づけを行なっているBurawoyら（1991: p.5）などを含めて、GT理解としては広く見られるものである。

次は、（ろ）の常識的カテゴリー（common-sense categories）の問題、月並みなカテゴリーを生み出してしまう危険性についての論点である。この（ろ）の問題は、GTが言うところのコード化作業が‘退屈’という印象、並びにぼくが‘瑣末主義のワナ’と呼びならわしている問題とも関連した論点である。

アルヴェッソンらによると、GTは次のような2つの問題を抱え込んでいるということになる。一つは、GTでは無反省な形でデータ処理の仕方が提唱されている、ということ（彼らは、〈an unreflected view of data processing〉（p.27）という言い方をしている）。その結果、月並みな思考、もしくは常識的思考からなる前科学的カテゴリー重視のバイアスが生み出されている、というものだ。もう一つは、コード化作業にあたって細かいところにこだわりすぎるのではないか、という指摘である⁶⁾。両方の指摘とも、なかなか考えさせられる論点である。とりわけ第1の論点が含まれている場合には、これらの指摘は深刻だと言えるだろう。

ここで‘なかなか考えさせられる論点だ’という具合に言うのは、何のためのコード化なのか、という点について、分析者の側がそれなりの考え・見識を持っていないままでStrauss & Corbin（1998）などのGTテキストでの例示に従って、言わば機械的＝自動的にコード化作業をやっているだけだと（ぼくはそれを〈‘カタチ’だけのコード化理解、もしくはコード化作業〉と呼んでいるが）、確かに、‘unreflective’（＝‘無反省’）という形容を生み出してくる側面があるからである。

第2の論点、つまり、コード化作業にあたって細かいところにこだわりすぎるのではないか、というのは、より具体的に言えば、データ分析開始局面である〈オープン・コード化〉作業場面で1語1語、あるいは1行1行、細かい作業をする場合についての指摘のことである。この第2の論点を第1の論点である無反省な形でコード化作業のイメージとドッキングさせてくると、ほとんど何も考えることなく細かいところに焦点化しながら行なわれるのがコード化作業ということになり、そうした作業なら確かに非常に‘退屈’だ、という印象を生み出してきたとしても不思議ではないだろう⁷⁾。

さらにこの議論の延長線上に、瑣末主義のワナの問題が出されている⁸⁾。GTにおいては、行為者レベルでの細かい分析が見られるわけだが、この行為者レベルに非常に近いところで分析がなさ

れているという点——それ自体は事実である——に関連させてアルヴェッソンらが出してくるのが、「GTには瑣末な知識 (trivial knowledge) を作り出してくるという危険がある」(p.29) という主張である。ここでアルヴェッソンらが念頭においているのは、そうした行為者レベルに焦点化した分析のやり方が、単に「この(=行為者)レベルで、明示的にか黙示的にすでに知られていることの再定式化(か、せいぜいが言い換え)にすぎないこと」(p.29)を帰結する可能性のことであり⁹⁾、GTを標榜する研究の中には確かにそうした傾向を指摘することができるように思う¹⁰⁾。

最後は、(は)のストラウス氏らが提起しているコード化枠組み(coding paradigm)についての批判的論評である。アルヴェッソンらは、まずStrauss(1987)からコード化枠組みに関連した箇所(p.27)を次のように引用する。

「……ある所与のカテゴリーによって指示された現象(その問題の現象がどんなものであれ)との関連を求めてデータをコード化するために用いるのが、コード化枠組みである。そこでの着目点は、

諸条件(Conditions)

複数の行為者間の相互行為(Interaction among the actors)

戦略と戦術(Strategies and tactics)

諸帰結(Consequences)

である」

その上で、次のようなコード化枠組の理解/解釈の仕方を示している。

「第1(=諸条件)と第4(=諸帰結)の概念は、因果性(causality)を指し示している。つまり、簡単に言ってしまうと、‘諸条件’というのは原因のことであり、そして‘諸帰結’とは結果のことである。後の二つは、ほとんど説明の必要がないだろう。‘複数の行為者間の相互行為’というのは、戦略や戦術の活用とは直接的に結びついていない諸関係のことを指し示している。」(p.23)

ここで注目したいのは、始めの二つの概念についての彼らのコメントである。ぼくの見るところ、この理解は、一気に因果関係に引きつけすぎていると言っていると思う(もちろん、〈条件〉や〈帰結〉が因果関係の議論に関連していることは認めた上での話だが)。〈条件〉はあくまで〈条件〉なのであって、〈原因〉と等置されては困るのである。なぜ困るか、というと、ここで設定されている〈条件〉というのは(もしくはそれに近い用語としての〈コンテキスト〉なども)、研究対象としようと思っている事象——ぼくの言い方では、‘ターゲット現象’——の構造的把握に向けて押さえておくべき着目点として挙げられてきているものであって、それらの〈条件〉(の、しかもある種のもの)がストレートに〈原因〉と見なせるものなのかどうか、については、本来なら、じっくり時間をかけて絞り込んでくるべき性格のものであって、アルヴェッソンらがここでやっているように、〈条件〉=〈原因〉などとあらかじめ設定すべきではないからである。ここでは、コード

化枠組みのこうした理解の仕方を指して〈‘きつきつの因果主義’的解釈〉と名づけておくことにする。他方、ある種のマニュアルのようにこのコード化枠組みを用いるやり方——こちらは、〈‘マニュアル主義’的解釈〉と呼ぶことにする——も、批判しなければならないのは、言うまでもない。

3. GT 法の分析的ポテンシャルを引き出してくるための着目点：

まず初めに、本稿のための準備作業を進める以前には、学会発表当日に配布したレジュメに追加する形で（自分用に）次のような口頭発表用準備メモを書きとめていた。

《上記の〈2.〉での論点を睨みながら、GT 法による概念化の論理の諸特徴について再検討を加えるのが、ここでの狙いです。大きくは、概念化作業の基本線についての考え方の再検討と、GT 法に特徴的な概念化の論理の意味づけや位置づけの再確認・再考を通して、GT 法的分析論理のプラス面を引き出してくることを目指そうというものです。前者の〈概念化作業の基本線についての考え方の再検討〉というのは、GT 法は帰納的アプローチか、という論点の検討を通じて、GT 法についての理解の微妙な修正を提起することになるはずでして——人によっては、‘大幅な修正を提起している’、という具合に言われるかもしれませんが——、ぼくが身近で観察・経験したアンセルム・ストラウスさんが実際にやっていたことからすると、それほど大きなズレではなく、彼の分析スタイルの精神を継承するという観点からは、それほどおかしい議論を展開しているつもりではありません。》

ところが、今回、本稿準備のための検討作業を通じてわかったことは、何と、ぼくがGTの分析的ポテンシャルという形で提起しようとしていたことは、実はストラウス氏の分析スタイルの精神を継承しているというだけではなく、彼の分析スタイルそのものの主要な側面を再確認・再認識していたのだ、ということである（この点については、すぐ後に見る）。

それはともかく、以下では、上に挙げた（い）（ろ）（は）の論点を睨みながら、GT 法の分析的ポテンシャルを引き出してくるために、GT 法による概念化の論理の諸特徴について再検討を加えることにする。

3.1. 7つの着目点と3つの検討テーマ：

ぼくが、GT 法の論理として着目するに値すると考えているものは、

- (a) 《帰納的アプローチ (inductive approach)》；
- (b) 《概念/指標 (concept/indicator)》モデル；
- (c) 《カテゴリー/特性 (category/property) と特性/次元 (property/dimension)》；
- (d) 《比較 (comparison)》；〈比較・対照〉効果；
- (e) 《理論的感受性 (theoretical sensitivity)》；
- (f) 《コード化枠組み (coding paradigm)》；

(g)《適合性と（現実場面での）作動（fit and work）》の発想；
の7つである。

なぜこの7つに注目するのか、という点については、ぼくなり理屈と言うか、正当化の論理・論拠を持っているつもりである。ここで各項目について簡単な説明をしておくと、次のようになる。

(a) と (b) については、概念化・概念構成の際の論理の特徴づけに関連した論点。

(c) の中の〈カテゴリー〉と〈特性〉のセットは、GTで理論を立ち上げていく際の出発点での基本的な発想である。他方、〈特性/次元〉の発想は、捉まえたいと思っている現象もしくはその諸側面のヴァリエーションを析出してくる際には効果を発揮するはずの論理である。

(d) は、絶えざる比較を駆使するということで、ぼくは、この技法を説明する際には、A（＝研究対象として設定したい‘ターゲット現象’）とB（＝その‘ターゲット現象’を浮かび上がらせるために動員してくる別のもの）とを‘ぶつつける’といった表現を使うこともある。GTの手法に内在しているものでぼくが高く評価しているものに、〈距離化の技法（‘distancing techniques’）〉もしくは〈異化の技法〉——‘同化’‘異化’という対比で言う場合の‘異化’である——と呼んでいるものがあるが、この〈距離化の技法〉を支え根拠付けている中心的論理が、実はこの比較の発想だ、という具合に考えている。

次は(e)である。問題としたい事象への切り込み方・取り上げ方・見通しのつけ方などについての直感的判断を念頭に置きながらなされる言い回しに、そうした判断は‘センスがいい’とか、‘センスがよくない’といったものがあるが、(e)に出てくる〈感受性〉というのは、そうした意味での‘センス’と関係があるものである。それでは、ここで言う〈理論的感受性〉とは何か。一つには、理論構築・理論産出の途上にある枠組みとの関連での感受性という意味。もう一つは、先行理論的なものを動員してくる際のセンスのよさ、感受性が考えられる。こうした二重の意味で重要なセンスを持っているかどうか、が問われているように思う。この関連で強調しておきたいのは、前者の意味でのセンスを研ぎ澄ます意味でも、自分の構築・展開しようとしている理論的なものが、先行理論的研究とどういった位置関係にあるのか、という点は、（そのことを著作の中で明示的に言及するか否かとは関わりなく）可能な範囲内で意識しておくべきであるということと、〈理論的感受性〉という意味の中には、対象とするテーマ領域に関連する先行理論的なものとの親和性・共振性・対照性・対抗性などへの目配りをも含めておいた方がいいということである。いずれにしても、この〈理論的感受性〉は、どういった質を持った理論構築をしていくことになるのか、という理論構築の質を規定してくる契機として重要な位置を占めていると言えるだろう。

(f) は、ストラウス版GTにおいてコード化作業をしていく際の基本的作業枠組みと言っていいもので、ぼくの位置づけでは、問題現象を構造的・プロセス的に把握していく上で非常に有効な枠組みの一つである¹¹⁾。

最後に(g)は、素材群、データ群とつきあう場合の基本原則の一つと言っていいものだ。

なお、ここで、これら7点に着目し、例えば、理論的サンプリングとか理論的飽和などの議論などは挙げてきていないわけだが（それらはそれらでそれなりに重要だとは考えている。実際の調査

研究をやろうとする立場からすれば、とりわけ理論的サンプリングの論理は相当重要なはずである)、そうした形で現れているぼくの立場に由来するバイアスについて、本人が自覚している範囲内で触れておけば、ぼくの興味関心は、言わば素材群やデータ群の分析局面の豊富化にある——つまり、GT 的手法のポテンシャルを可能な限り生かしながら、素材群やデータ群の分析作業の際にそれらが使える範囲内でいわば‘隠し味’的に活用してこようという——のであって、最初から最後までGT 法に則った形で調査研究を行ない研究成果を出していこうとは考えていないということになる。

以下では、これらの項目のうち、(a) (b) (f) の3つに関連した次のようなテーマについて、少しでも踏み込んだ話をしてみる。それらは、

- (A) GT 法は帰納的アプローチ (inductive approach) なのか
- (B) 《概念/指標 (concept/indicator)》モデルのありうる意味をどう考えるか
- (C) コード化枠組み (coding paradigm) をどう位置づけ、どう生かすか

の3つである。

3.2. (A) GT 法は帰納的アプローチ (inductive approach) なのか：

(A) の論点については、先にアルヴェッソンらの議論を紹介するセクションでも見たように、‘GT 法は、当然帰納的アプローチでしょう！’という答えが返ってくるように思う。ここで検討してみたいのは、そこで帰納的アプローチと言う場合のありうる意味である。ぼくは、‘帰納的アプローチ’という場合は、次のような3つの意味を区別することができるのではないかと考えている。

第1は、(情報処理の際に) ボトム・アップ的作業をするという意味である。これは、先に見たアルヴェッソンらの議論で言えば、「GT はデータから引き出されてくる (‘derived from data’) ものなので、その理論は、帰納的に展開されるものである」(Alvesson ら [2000: p.16]) という場合の、とりわけ ‘データから引き出されてくる’ という側面に注目したもので、素材群やデータ群にもまれながら知見を引き出してくるという形での情報処理の基本的スタイルのことを指す。これとは対照的な作業の仕方が、トップ・ダウン的な情報処理であって、こちらは、ある種の既存の認識枠組・整理枠組みなどを前提にしてその枠組みを当て嵌める形で素材群やデータ群をまとめ上げていくものである¹²⁾。

第2は、帰納的論理 (inductive logic) を用いて物事に接近するという意味。これは、統計学においてサンプルと母集団との関係について言われる論理と言っているもので統計学的推論 (もしくは統計学的推測) に典型的に見られるものである。いくつかのもの (some) について当てはまることを踏まえて、(そのいくつかが属するところの) すべて (all) について当てはまるはず、という形で推論をしていくやり方のことだ¹³⁾。

第3は、仮説を思いつく・発想する、という特徴を持ったアプローチという意味である。これまた、「GT はデータから引き出されてくるものなので、その理論は、帰納的に展開されるものであ

る」(Alvesson ら〔2000: p.16〕)を使って説明すれば、‘引き出されてくるもの’、‘理論’をどうやって思いつくのか、発想・構想するのか、という点に着目すると浮かび上がってくる意味と言えるだろう。

帰納的アプローチと言っても、このように3つの意味の可能性があるということである。

この点を押えておいて、〈GT法は帰納的アプローチ(inductive approach)なのか〉という問題を考えていってみることにする。これから考えてみたいのは、GTの場合は、どの意味で‘帰納的アプローチ’と言っているのか、ということである。この問題に迫っていくために、ここでは、GTの基本文献の中から主要な議論を2つ例示的に出しておくことにする。

まず *The Discovery of Grounded Theory* (1967)での議論から。興味深いことだが、少なくとも末尾にある英文の索引を見る限りでは、GTの形容として、‘inductive approach’という言い方は出てこない。ここは‘grounded’という言い方で議論が提示されている、と考えておいた方が、よさそうである。他方、彼らの議論の対抗馬と言っていい〈論理的演繹(logical deduction)〉の方はちゃんと出ている。それはともかく、そこでの議論の中心が、《理論検証(verifying theory) vs. 理論産出(generating theory)》の対比、あるいは、《論理演繹型理論 vs. データ対話型理論》の対比、にあったことは、言うまでもない。

次は、ストラウス氏の名著 *Qualitative Analysis for Social Scientists* (1987)での議論である。ここには、(ぼくが気づいている限り)〈帰納(induction) vs. 検証(verification)〉の対比(p.55)と、〈帰納(induction)と演繹(deduction)と検証(verification)〉(pp.11-14)というセットの形で議論の2箇所がある。

まず第一の箇所から。ぼくはこの本には愛着があって非常に好きなのだが、今度の議論関連の作業をする前にうろ覚えで頭の中で考えていたのは、〈帰納 vs. 検証〉の方である(ちなみに、ぼくはこれを〈帰納 vs. 演繹〉の対比の形で、勝手に勘違いして覚えていた)。問題の箇所を読み返してみると、「第3章 コードとコード化」の冒頭部分でGTアプローチに関する誤解(misconceptions)を晴らすという議論脈絡で注が打たれていて、その中で、いわば誤解的GT把握の特徴を挙げてくるというくだりで、この対比が次のように出されてくる。

「これらの誤解に含まれるのは、このアプローチ(=GTアプローチのこと)は、(1)まったく帰納的なもの(totally inductive)であり、(2)知見の検証を行なわない(does not verify findings)、ということ(=主張)である。」(p.55)

これを裏返すなら、帰納と検証の双方に目配りすべきだ、という趣旨に取れることになるかと思うが、この箇所を読むだけでは、どういう意味で、‘帰納的’と言っているのかは、わからないままである。

次は、イントロでの〈帰納と演繹と検証〉とがセットにして出されてくる議論の方である。実を言うと、ぼくはそこでの議論を読んで驚いてしまったのだが(何に驚いたか、という点については、

すぐ後に述べる), その議論を簡単に紹介すると次のようになる。

ストラウス氏は、GT だけではなく、思弁を排する科学的諸理論であれば基本的にデータに根拠を持っているということ（《a grounding in data》(p.11)）がなければならないとした上で、そうした科学的諸理論に必要とされる第一の要件として、「それら（＝科学的諸理論）は、着想され（be conceived）、次に練り上げられ（then elaborated）、それから点検される（then checked out）必要がある」（p.11）という指摘を行なっている。そして、これら3つは、探求の3つの側面なのであって、それをストラウス氏は、〈帰納、演繹、検証〉と呼ぶのがいい、と言っているのである。そして、ここからより詳しく3つの用語の説明がなされている。今直接的に関係があるのは、帰納なので、その説明を見ていくが、こういう具合になっている。

「帰納というのは、仮説の発見へと導いていく行為のことである。つまり、閃きとかアイデアを思いついて、それからそれ（＝閃き）を一つの仮説に変換し、その仮説が暫定的に作用を発揮するかどうかを評価する——つまり、一つのタイプの出来事や行為、関係、戦略等などの条件の一部として、少なくとも作用を発揮するかどうか、を評価する——ということである。（ここで言う）仮説は、暫定的でかつ条件的な〔性質の〕ものである」¹⁴⁾。

要するに、暫定的な仮説を思いつき提起することを指して、‘帰納’と言っていることがわかる。先にぼくが挙げた3つの意味で言うと、3つ目の意味で‘帰納’と言っていることになる。そして、こうした閃きや洞察、仮説を生み出してくる疑問・設問（generative questions）はどういったところに由来するのか、と問いかけながら、その源泉について、「それらは、この種の現象と切り結ばれた以前の体験に由来するものである」（p.12）とした上で、さらにより詳しく「その体験が個人的なものであれ、より‘専門的に’行なわれたその現象への探求的調査研究に由来するものであれ、以前の調査研究プログラムからのものであれ、あるいはまた（調査研究者が専門文献について知っているという理由から〔生み出されてくる〕）理論的感受性からのものであれ」（p.12）と述べている。この脈絡でぼくが驚いたのは、この帰納についての説明をしている終わりのところにわざわざ注が打ってあって、そこに、何と、「アメリカのプラグマティストであるチャールズ・パースの著作を参照のこと。彼のアブダクションの概念は、調査研究活動のこの第1局面における体験の決定的な役割をとりわけ強調するものであった。」（p.12）という形で、パースの、しかも‘アブダクション’への言及が出てきている点である。ここには、ぼくが本稿で主張しようとしていること、つまり、《アブダクション的契機を含み持ったものとしての帰納》という議論にきわめて近い発言を見出すことができる¹⁵⁾。

この（A）セクションでの小活としては次の2点を指摘しておく。第1点は、GTでの分析作業は第1の意味と第3の意味で‘帰納的アプローチ’と言えそうだということである。第2点は、‘帰納的’という言葉にはどうしても‘帰納的推論’の含意・コノテーションがついてまわるので、‘GTでの分析作業は、帰納的アプローチ’として定式化するよりも、〈〈ボトムアップ〉〉的検討作業+仮

説産出志向〉として位置づけた方がいいのではないか、ということである。

以上の検討を踏まえて、‘仮説産出’、‘仮説を思いつく’という第3の意味をさらに検討するために、次の(B)へと話を進めていくことにしたい。

3.3. (B)《概念/指標 (concept/indicator)》モデルのありうる意味をどう考えるか(その1): 概念と指標とをつなげる発想について;

《概念/指標 (concept/indicator)》モデルというのは、具体的な素材群、データ群を相手にしながら概念化作業を行なっていく際の基本的な考え方としてGT法が採用しているものである。分析者が創出・発見してこうとしているのが‘概念 (concept)’、対象とする素材群の中でこの概念化作業(GTでは‘コード化’と呼んでいる)との関連で引っかかってくるものが‘指標 (indicator)’である。つまり、《Xという概念上の事象(→これが‘概念’)を経験的=素材レベルで指し示すものとしての(複数の)‘指標’》という形で両者が結びつけられているということである。このように、この議論は概念化立ち上げ局面での主題なのだが、ここでそのポイントを再確認しておけば、

- ① このモデルでは、概念レベル(→‘概念’)と経験的=素材レベル(→‘指標’)という二元論的発想が前提にされていること、
- ② 素材レベルに見られる複数の指標群は、対象とする概念を指し示すものという位置を占めており、その限りで、相互に交換可能・代替可能(interchangeability)と考えられていること、さらに
- ③ 両者、つまり概念と指標の関係は、一義的に決まるのではなく、パースペクティブの関数として決まってくるものであること、

この3つになる。とりわけ、②や③のポイントが重要で、ここからは、先に《Xという概念上の事象……を経験的=素材レベルで指し示すものとしての(複数の)指標》とした場合のXを埋めるものとして、分析者が構想してくる(概念としての様々な展開可能性を持った)複数の〈概念候補 (concept candidates)〉という発想を引き出し出してくることができる。

それはともかく《概念/指標》モデルの発想というのは、指標群から概念形成がなされてくるとを意味している。ここでは、そうした形で概念が生み出されてくるという場合、そこに作動している論理は何なのか、という点についてパースのアブダクションの論理の検討を通じて考えてみることにしたいと思う。が、その議論に入る前に——この発想の特徴を際立たせるという狙いも込めて——、概念と指標とをつなげるという発想自体について言えば、実はそれがストラウス氏らのみの特殊なものではないという点を初めに見ておくことにしよう¹⁶⁾。

ここで比較対照として注目しておきたいのは、社会調査の分野では一世を風靡した感のあるP. Lazarsfeldら(1955)の議論である。その議論の特徴は次の2つである¹⁷⁾。第1は、ラザースフェルトらの議論は、《概念・指標・複合指標 (concept/indicator/index)》の議論とでも言えるものであり¹⁸⁾、概念と指標群とをつなげようとしている限りでは、GTの《概念/指標》モデルと類似

した側面を持っているということが出来る。第2は、両者のつなげ方の議論である。そこに見られるのは、「諸概念はどのようにして経験的複合指標に翻訳されるのか」(p.15) という発想であり、これは、GT 的発想との断絶面とみなすことができる。と言うのも、GT の場合は、〈指標から概念へ〉という方向性を持っているのに対して、ラザースフェルトらの場合は、〈概念から指標を経て複合指標へ〉という逆の方向性を持っており、その意味で、概念の構想の仕方の議論がやはり、GT の場合とは180度異なっているからである。

3.4. (B) 《概念/指標 (concept/indicator)》モデルのありうる意味をどう考えるか (その2) : C. S. Peirce のアブダクションの論理の検討 ;

指標群から概念を作り出してくるという場合、そこでは一体どういう事態が進行しているのだろうか。ここではこの問題を、C. S. Peirce のアブダクションの論理の検討を行なう形で行なっていくことにしよう¹⁹⁾。

このセクションの議論は若干長くなるので、ここでの話の進め方の順序について簡単に触れておくことにする。まず初めに、アブダクションについての大雑把なイメージを定着させるために、パース自身が挙げているアブダクションの例示と定義を簡単に紹介する (→ <3.4.1.>)。次に、アブダクションの論理の解釈の仕方を3つほど紹介する (→ <3.4.2.>)。さらにそれら3つの解釈の仕方との関連でぼくの立場を鮮明にした後、再度、三つの解釈の仕方の一つである仮説形成としてのアブダクション理解の議論の再検討を行ない (→ <3.4.3.>)、GT の論理との接続可能性について言及する (→ <3.4.4.>)。そして最後にここでの主張の再確認をすることによって (→ <3.4.5.>)、このセクションを締めくくることが出来る。

3.4.1. アブダクションの例示と定義 :

アブダクションとは何か。この概念を理解するために、まず初めに彼が挙げている有名な例示を紹介することにしよう²⁰⁾。

「わたしはかつてトルコのある地方の港町で下船したことがあった。わたしが訪問予定の家の方に歩いて行っていた時、馬に乗った一人の男性に出くわした。この男性は4人の騎手に囲まれていたが、騎手たちは彼の頭上に覆いかぶさる形の天蓋を持っていた。これほどまで重んじられる名士ということになると、わたしにはこの地方の知事のほかに考えられなかったもので、この人はこの地方の知事なのでは、と推論した。これは一つの仮説だった。

化石が発見される。それはたとえば魚の化石のようなもので、しかも陸地のずっと内側で見つかったとしよう。この現象を説明するために、われわれは、かつて海がこの一帯の陸地をおおっていたのでは、と推測する。これもまた仮説である。

無数の文書や遺跡がナポレオン・ボナパルトという名前の支配者に関連している。われわれはその男性を見たことはないが、しかしかれが本当に実在していたと想定しなければ、われわれはわれわれが見

たもの、つまりすべてのそれらの文書や遺跡を説明することができない。またもや仮説である。」
(Houser ら [1992: p.189] ; 米盛 [1981: p.191] の訳を一部変更)

見られるように、これらの例示に出てくるのは、仮説についての話である。そして実は、アブダクションというのは、仮説の提示の脈絡で出されてくる議論なのである。

その点の説明をパース自身の言葉で再確認しておけば、次のようになる。彼が注目するのは、「われわれの期待に反する諸事実が生じてくると説明が必要とされる」(the Peirce Edition Project [1998: p.94]) という事態であり、その時、そうした説明のための仮説を——つまり、「そのものとして確度の高い説得力を持ち、しかもその問題の諸事実を説明してくれる確率の高い、そうした仮説」(p.95) を——採用することが必要になってくる、と言う。こうした議論脈絡の中で「問題の諸事実に示唆されたものとして一つの仮説を採用するというこのステップこそ、私がアブダクションと呼ぶものである」(p.95) という具合にアブダクションの定義がなされている。アブダクションは推論の一形式だとパースが考えている(後述参照)点をも考慮に入れるなら、彼が言うアブダクションというのは、要するに、期待に反する問題の諸事実を説明してくれる仮説的推論を行なうことと言っていいだろう。

3.4.2. アブダクションの論理——その3つの解釈の仕方について：

アブダクションとは、パースが推論の論理のうちの一つとして提起しているものだが、実は社会調査研究の分野でパースのアブダクションの論理の重要性に着目した研究者たちは、すでに Kelle (1994: pp.163-180), 山田 (1998: pp.51-61), Alvesson ら (2000: p.17), Danermark ら (2002: pp. 88-95), 能智 (2004b: p.284), Atkinson & Delamont (2005: p.833), 西山ら (2005: pp.74-75) などを含めて、少なくない。そうした中で、ここでは、パース自身のアブダクション論というよりも彼の議論に関する先行研究の成果を踏まえて、次のような3つのアブダクションの論理の解釈の仕方に注目する。それらは、

- (イ) 論理的推論の一形式,
- (ロ) 仮説形成の論理,
- (ハ) 再コンテキストづけの論理,

の3つである。以下、この各々の解釈の仕方を順を追って紹介していく。

まず(イ)の論理的推論の一形式としてのアブダクション論である。ここでは米盛(1981)での議論を援用しながら、その特徴を押さえておくことにしよう。

「……意外な事実の観察から出発し、その事実が何故起ったかを説明し得ると考えられる仮説の提案を行うのがアブダクションの役割である。」(米盛: p.189)

ここには、アブダクションの役割、事実、観察とそれらの相互的位置関係が簡潔に述べられている。つまり、アブダクションの役割は「仮説の提案」であり、アブダクションの取り扱う事実は「意外な事実」、「探究を引起した最初のある意外な事実」(米盛: p.190)である。そして「アブダク

ションが行う観察——すなわちアブダクティブな観察——はその意外な事実に説明を与えるような仮説を提案するための観察である。」(米盛：p.190) 要するに、アブダクションというのは、‘意外な事実’から出発しそれらを観察する中からそれらの事実を説明できる‘仮説の提案’を行なう、ということである。こうして「アブダクションの論理的機能はある意外な事実を合理的に説明することである」(米盛：p.190)と主張されることになる。その際、パースは、合理的な説明のための二つの手続きを挙げていると言う。一つは、説明仮説を受け入れれば、ある意外な事実が必然的な結果であることを示すことができることである。二つ目は「その説明仮説は帰納的確認によって十分な支持を得ること……」(米盛：p.190)である。

以上を再確認しておけば、推論の一形式としてのアブダクションの特徴は、次のようになる。「驚くべき事実 C が観察される。しかしもし A が真であれば、C は当然の事柄ということになるだろう。よって、A が真ではないかと考えるべき理由がある。」(the Peirce Edition Project [1998: p. 231]；米盛 [1981: p.196] の訳を一部変更)

今度は、(ロ)の仮説形成の論理としてのアブダクションである。ここでは、この解釈の仕方の典型を上山 (1968) の議論で見ておくことにする。

上山 (1968) はまず、すぐ上の (イ) 論理的推論の一形式としてのアブダクション論の水準での議論から始めている。彼は「プラグマティズム認識論の核心をつかんだ言葉」(p.98)という位置づけの下に、「あらゆる概念の要素は、知覚という門を通して論理的思想の国に入り、目的をめざす行動という門を通してこの国を出る……」(p.98)というパースの有名な文章を引用してくる。この引用に見られるように、上山 (1968) の場合、アブダクションは《知覚→思想→行動》というサイクル (p.99) の中で位置づけられている。より詳しく言えば、《知覚→思想》過程の論理が《アブダクション》、《思想→思想》過程の論理が《ディダクション》、そして《思想→行動》過程の論理が《インダクション》という具合に位置づけられているのである (p.101)。

しかし、上山 (1968) の議論としては、こうした把握以上に、(ロ)の仮説形成の論理としてのアブダクション論の方にこそ注目すべきであろう。それを上山は‘探究の三段階’論として提起する。つまり、「三つの推論過程は、はじめ形式論理学のわく内であつかわれたが、次第にそのわくがとれて、「探究の三段階」として規定されるようになる」(p.106)とした上で、「《アブダクション》は、探究の第一段階であり、仮説形成 (新しい理論の発見、新しい着想) の過程である。この過程は、(一) 現象の観察を起点とし、(二) 仮説の発見をへて、(三) 仮説の定立におわる」(p. 106)と定式化している。見られるように、そこでは《仮説形成 (新しい理論の発見、新しい着想)》としてのアブダクション (p.106) が提起されている²¹⁾。

最後は、(ハ)再コンテキストづけの論理としてのアブダクション論である。この解釈を提出しているのは、Danermark ら (2002) である²²⁾。

すでに先に見たように、アブダクションの場合、意外な事実に対する仮説の提案を行なうわけであるが、なぜそうしたことが可能になるのか、と考えた場合、(どういう事情でそうなったのか、はともかくとして) そこに‘意外な事実’を説明してくれると思われる解釈視点・解釈枠組みという

コンテキストが入り込んできていることは確かである。そうだとすると、アブダクションが作動している場合には、意外ではあるが既知の現象を新たな解釈枠組み（もしくは規則、理論、パターン等）に照らして解釈することに成功している、と見なすことができるだろう²³⁾。ここで、「新しいコンテキストという枠組みの中で物事を観察・記述・解釈・説明すること」(p.91)を指して《再コンテキストづけ (recontextualization)》と呼ぶとすれば、アブダクションが一種の《再コンテキストづけ》であるとみなすことができることになる。

ここで注目しておきたいのは、この再コンテキストづけの論理としてのアブダクション論というのは、《何らかの解釈枠組みがあるからこそ、そうした解釈が可能になるのだ》と主張しているという意味で、そうした解釈枠組みの働き・作用を重視する立場であるという点である。

3.4.3. アブダクションについてのぼくの立場：仮説的に提示される‘結晶化’的認識としてのアブダクションという把握；

以上の検討を踏まえて、アブダクションについてのぼくの立場について一言しておけば、基本的に仮説形成としてのアブダクション理解に賛成ということになる。ここで再コンテキストづけとしてのアブダクション理解との関連で述べるなら、再コンテキストづけと言うよりも、コンテキストづけとしてのアブダクション理解の方を採用する。つまり、再コンテキストづけだけではなく、コンテキストづけとしてのアブダクション理解もありうるし、こちらの方こそがアブダクション理解のかなめと考えるべきではないか、という立場である。

では、コンテキストづけとしてのアブダクション理解とはどういうことか。一言で言えば、仮説的に提示される‘結晶化’的認識のことである。こうした把握の仕方をどうやって導き出してきたのかを説明するために、ここで仮説形成としてのアブダクション理解の議論の再検討を行なってみよう。

先に見たように、仮説形成としてのアブダクション理解のポイントは、「(一) 現象の観察を起点とし、(二) 仮説の発見をへて、(三) 仮説の定立におわる」(上山 [1968: p.106])と定式化できるものであった。現象の観察を起点にしているということは、一見すると説明のつけにくい‘意外な事実の観察’からスタートしているということである（これは‘規則’や‘解釈枠組み’などが議論の出発点である再コンテキストづけ論の場合とは対照的と言っていいものである）。この‘意外な事実の観察’をしながら、仮説の発見へと向かっていくわけだが、このことの意味を考える前に、観察対象として注目すべき‘意外な事実’の範囲・タイプを次のような形で括げておくことにしたい。

まずそうした‘意外な事実’の中に、‘際立った’事実なども含めたい。これは、‘普通でないもの (the ab-normal)’への着目ということである。次に、‘(一見すると) 理解が難しい’事実も含めたい。そして最後に、バラバラの‘断片的’事実も含めたい。

なぜ、こうした拡大を提言するのか。それは、質的データ分析（素材群分析）の立場からすると、分析者は、どう理解していいのかわからない‘断片的事実’、どう意味づけていいのかわからないバ

ラバラの‘断片的事実’に晒されるところから出発することが多いからであり、しかも、分析者としては、何らかの形でそれらを全体的な‘何か’として理解し意味づけていく必要性に迫られている、という基本的事態を視野の中に入れておきたいからである。

この、どう理解していいのかわからない‘断片的事実’、どう意味づけていいのかわからないバラバラの‘断片的事実’——さらには断片的な部分情報の‘山’が生み出してくる‘(多くの場合は、心理的) カオス’——にどう対処するか、どう向き合うか、という問題は、煎じ詰めるなら、部分情報の蓄積から全体認識へといった論理をどう考えるかという問題に帰着する。

これを、先に仮説形成論としてのアブダクション論で見た〈現象の観察→仮説の発見→仮説の定立〉というプロセスの議論と重ね合わせてみると、〈部分情報の蓄積→仮説的な形での全体認識の発見→全体認識の定着〉と読み直すことができるように思う。この点を踏まえて、部分情報の蓄積から全体認識へといった論理をどう考えるかという問題についてのぼくの見解を述べれば、次のようになる。

- ① 部分情報の蓄積や積み重ねから、自動的に全体認識が生み出されるわけではない。
- ② しかし、にもかかわらず、部分情報とのつきあいは無視できない（もしくは非常に大切である）。
- ③ そうしたつきあいの中から、突然（←認識・発想上の飛躍の存在）、全体認識にいたることがある。

そして、この③こそが、つまり突然の全体認識にいたるといふ、この認識上の飛躍という点こそが、仮説形成論としてのアブダクション論で言うところの〈仮説の発見〉にあたるのであり、その特徴を定式化するとすれば、仮説的に提示される‘結晶化’的認識と呼ぶことができるのではないか、ということである²⁴⁾。

ここで部分情報の蓄積と全体認識との関連という観点から見た〈部分情報の蓄積から全体認識へといった論理〉についてのぼくの見解に関連させて、次の2点を指摘しておく。一つは、部分情報の蓄積こそが、ボトムアップの契機であり、これは‘データに由来する’側面と呼ぶことができる。もう一つは、蓄積された部分情報群に見通しを与えてくれる全体認識が生み出されてくるためには認識上の飛躍が介在せざるをえないのであり、すぐ上で見たようにこの事態がアブダクションの契機なのであり、こちらの方は‘仮説・理論の産出’側面と呼ぶことにしよう。

以上の説明を踏まえて、ぼくとしては、断片的なパーツとしての事実（群）を仮説的に束ねあげ‘結晶化’させていく全体認識としてアブダクションを考えたい。

3.4.4. GT の論理との接続可能性：

それでは、再コンテキストづけ、仮説形成、‘結晶化’的認識という各々のアブダクション理解とGTの論理との接続可能性について触れてみよう。

まず再コンテキストづけとしてのアブダクション理解の場合には、新たな形でのコンテキストづけを可能にする仕組みとして、パースペクティブとしての理論等の存在があらかじめ想定されてい

るという点において、そうしたものを想定しない GT の発想とは矛盾する²⁵⁾。

次に仮説形成としてのアブダクション理解の場合には、《仮説形成（新しい理論の発見，新しい着想）》としてのアブダクションということであれば、もうそのまま GT 法の概念形成の論理として採用できるはずである。

最後に仮説的に提示される‘結晶化’的認識としてのアブダクション理解の場合にも、仮説形成としてのアブダクション理解の場合と同じく、GT の論理との接続が可能である。

ここで念のためにこれまで何をやってきていたのかを再確認しておけば、要するに、ここでは、仮説構築局面での議論をやってきたのであり、しかも、アブダクションが仮説構築局面での議論であるということと、GT の論理をアブダクション的に読み取ることができるという点の主張を再確認しているのだ、ということになる。先に (A) セクションでの小活において《GT での分析作業は、……〈〈ボトムアップ〉〉的検討作業＋仮説産出志向〉として位置づけた方がいいのではないか》、と述べた主張自体、《GT は〈ボトムアップ＋アブダクション〉という形で位置づけ直すことができる》ことを意味していることになり、ぼくとしては、こうした位置づけ直しが重要だ、と主張しているわけである²⁶⁾。

3.4.5. ここでの主張とその理由：

以上を踏まえてここでの主張を再確認しておけば、次の 3 点になる。

第 1 は、ぼくとしては、仮説的に提示される‘結晶化’的認識としてのアブダクション理解を採用したいということ、

第 2 は、アブダクションにおいては、発想上の飛躍があるということ、

そして第 3 は、《GT の基本的発想は〈ボトムアップ＋アブダクション〉という形で位置づけ直すことができる》し、そうした位置づけ直しが重要だということである。

なぜ、こうした主張をするのか。その理由は次の 3 つである。

まずアブダクションに注目する理由から。これは、素材群やデータ群を相手にしながら生み出されてくるアイデアや閃き（仮説形成へとつながっていくかもしれないアイデアや閃き）を大切にしながら、素材群やデータ群を束ね上げていくことができるかもしれない意外な視点の発見、もしくは‘結晶化’的認識の獲得にあたって働いているのが、アブダクションの論理だと思うからである。

次は上記の第 3 点目の主張（→《GT の基本的発想は〈ボトムアップ＋アブダクション〉という形で位置づけ直すことができる》という主張のこと）の観点から見た《概念/指標》モデルの意味である。説明としては若干長々しくなるが、このモデルの意味は、経験的レベルに存在する多数の素材群という‘鬱蒼とした森’に踏み入る中から、‘注目すべき事実’という様々な指標の‘樹々’にさらされ、それらの‘樹々’から刺激を受けながら（←これらはボトムアップ契機的作用）、着目すべき概念や概念候補を思いついてくる（←こちらがアブダクション契機的作用）のだ、ということである。

最後は第3の主張にこだわる理由である。それは、この《GT=ボトムアップ+アブダクション》路線を採用すれば、アルヴェッソンらの第2の批判、つまりGTは月並みなカテゴリーを生み出すだけではないか、とか、コード化作業は退屈だといった議論は、少なくとも理屈の上では、そして（この理屈を体現した作業をやっていければ）実践的にも——つまり、作業の遂行次元でも——乗り越えていくことができるはずだと考えているからである²⁷⁾。

3.5. (C) コード化枠組みをどう位置づけ、どう生かすか：

ここでコード化枠組み(coding paradigm)と呼んでいるのは、直接的には、Strauss (1987: pp.27-28) で素材群やデータ群をコード化=概念化していく際の作業手続きにとって中心的位置を占めるものとして提起されているものである。そこではこの枠組みの構成要素として、《諸条件(Conditions)；複数の行為者間の相互行為(Interaction among the actors)；戦略と戦術(Strategies and tactics)；諸帰結(Consequences)》の4つが挙げられている²⁸⁾。これらの用語を見ればわかるように、これらは分析対象とする‘ターゲット現象’との関連で多様な位置価値を持ちうる素材群やデータ群——しかも、分析作業の、とりわけ初期局面においては、それらの位置価値を確定するには程遠いところから取り組まなくてはならない素材群やデータ群——を、構造的もしくはプロセス的に位置づけてくる際に用いられるものだ。

ここで注意を喚起しておきたいのは、(分析作業にあたって) ぼくたちが向き合わなければならない素材群やデータ群は基本的に多義的な意味合いを持っていること、またその位置価値も多義的なもので、分析作業というものは、そうした二重の意味で曖昧、多義的な事情を構造的に抱え込みながらなされていくものである、という点である。この点を肝に銘じておかないと、——コード化枠組みはそれなりに説得力のある魅力的な分析の視点を提供してくれるだけに——、コード化枠組みを単に(素材群やデータ群への)押しつけモード、当て嵌めモードで用いることになってしまうという危険性が待ち受けていることになる。

このように多義的な素材群・データ群を相手にしているのだ、という点を念頭におきながら、(C) コード化枠組みをどう位置づけ、どう生かすか、という問題に関連させて、大きくは次の3点のコメントを行なっておくことにする。

第1は、コード化枠組みがいくつかの意味で‘ゆるやかな因果論’的特徴を持っていると解釈できることである。

これは、一つには、コード化枠組みの4つの構成契機自体が‘ゆるやかな因果論’を保証する仕組みとなっているからである。この枠組みは、先に見たアルヴェッソンらのいわば‘きつきつの因果主義’的解釈とは違って、ストレートに《原因→結果》の脈絡でターゲット現象を考察するのではなく、〈原因〉の代わりに〈条件〉を入れ込むことによって、因果関連をまずは間接化(=‘ゆるやかに’)している、とみなすことができるものだ。次いで、〈戦略・戦術〉という行為主体側の契機と〈相互行為〉という相互作用の連鎖の契機は、〈条件〉と〈帰結〉との間にいわば構造的に挟みこまれているわけだが、このことは、研究対象である‘ターゲット現象’が間接的な効き方の仕

組みの中で生起するものであるという認識に立っていることを意味している。

二つ目には、〈条件〉という着目点を次のように考えることができるなら、——そしてばくとしては、そのように考えることができるし、考えるべきだと思うが——これまた‘ゆるやかな因果論’的発想を保証することができるはずである。それは、‘ターゲット現象’を、あるいは‘規定(determine)’し、あるいは‘方向づけ(direct)’、あるいは‘枠づけ(frame)’ているかもしれない多様な素材群やデータ群を、‘ターゲット現象’との関連で位置づけてくる（これをすぐ上では‘位置価’と表現しておいた）際の着目点として、〈条件〉という発想を採用するというやり方である。

そして三つ目には、〈帰結〉自体が新たな〈条件〉を生み出してくる可能性があつて（これは一種のフィードバック効果論である）、この視点を入れ込んでくれば、そこに単なる因果関係の論理とは違った論理を見出すことができるはずだからである。

第2は、コード化枠組みの中の〈戦略・戦術〉の契機と〈相互行為〉の契機とは分析的に区別しておいた方がいい、という主張である。なぜこの主張をするのか、と言えは、それは、こうした区別をしておけば、《戦略・戦術；相互行為；戦略・戦術と相互行為との関連づけ》という3つの水準での議論を保証することができるからである。

この点を確認した上で、各々の水準を設定する狙いを簡単に見ておくことにする。まず、戦略・戦術水準設定の狙いは行為主体たちの側の意識的な意図・狙いの契機自体の主題化にある。ストラスウス氏自身は、こうした位置づけや主張を行なっているわけではないが（ただし、Strauss (1993)の中での議論には、この点に関しても、相当錯綜した議論が見られるはずと見ている）、ばくとしては、ここでは意識的に M. Weber 的発想の組み込みを行なつて、（素材群やデータ群との関連で可能ならば、という条件付きでの話だが）動機理解的視点をも入れ込む形で分析作業を進めるべきであるということである。次に相互行為水準設定の狙いは、と言えは、行為連鎖・相互作用のダイナミズムの主題化ということである。これは、複数の行為主体間に見られる相互行為/相互作用自体が個々の行為主体の行為には還元することができない側面を持っており、それ自体が創発的に生み出されてくる独自の論理を備えているからであり、その点に目配りした議論が必要とされていると考えるからである。この水準に着目することによって、システム効果論的議論の組み込みが可能になってくるはずである²⁹⁾。最後は、《戦略・戦術と相互行為との関連づけ》水準設定の狙いである。これは、ウェーバー理解社会学で言うところの因果連関と意味連関との関連づけを視野に入れ込んだ議論の主題化を意図したものである（M. ヴェーバー [1972: pp.16-21]）。

第3は、コード化枠組みの生かし方に関連させて、〈素材を潜り抜けながらコード化諸契機の特
定化を行なう〉という発想の大切さを強調しておきたい。この議論脈絡でぜひとも注目しておいて
もらいたいのは、コード化枠組みの発想においては、何の条件、何の帰結といったことはあらかじめ
明示されているわけではない、という点である。この明示がないだけに、分析者は、素材群やデ
ータ群と向き合う中で、それらの顕著な現われに刺激されながら、また分析者の側の顕在的・潜在
的分析視点にも促される形で、（ここでは〈条件〉を例示に用いながら説明すれば）ミクロ社会的

条件、メゾ社会的条件、マクロ社会的条件、あるいはまた心理的条件、物質的条件、文化的条件など、仮説的に思いついたり思い当たったりする諸条件を挙げてきながら、素材群やデータ群の試行的分析作業、検討作業を進めていくことが期待されているのである。つまり、初めから何が条件や帰結になるのか、という点を決めつけるのではなく、素材群・データ群と向き合う中から分析者がそれらとの関連で実質上効果を発揮している可能性の高い条件群や帰結群を（場合によっては何度もの試行錯誤を経ながら）引き出し/絞り込み/特定化してくることができる仕組みとしてコード化枠組みは設定されている、という具合に理解することができるし、そう理解すべきだということである。さらに言えば、条件や帰結の違いによってターゲット現象の内実が大きく変わる可能性があるかもしれないという点への目配りを組み込んでおくことなども期待されていると言っていいだろう。要するに、素材を潜り抜けながら条件や帰結などコード化諸契機を特定化してくるという発想を大切にしたい、ということである。

4. 終わりに：

それでは〈1. はじめに〉で提起しておいた問い、つまり、GT の分析的ポテンシャルはどこにあるのかという点に答えておくことにしよう。

本稿では GT 法の論理として注目するに値する着目点として7つをあげた上で、(A) GT 法は帰納的アプローチ (inductive approach) なのか、(B) 《概念/指標 (concept/indicator)》モデルのありうる意味をどう考えるか、(C) コード化枠組み (coding paradigm) をどう位置づけ、どう生かすか、という3つのトピックに絞って、ある程度の詳しさを検討を加えた。その検討作業を踏まえて言えば、GT の分析的ポテンシャルとしてばくが注目してきたのは、要するに次の3点だったということができる。

一つ目は概念化の論理である。‘帰納的’アプローチの典型とみなされている GT という議論の中に、実は仮説形成の論理としてのアブダクション、さらに言えば、仮説的に提示された結晶化的認識としてのアブダクションの論理が潜んでいるのだ、という点を指摘しておいた。

二つ目は、素材群からの概念化という方向性そのものである。経験的事象と概念的事象とが切り結ぶ地点に見出されるのが指標群と言っていいと思うが、そうした性格を持った指標群から概念化を立ち上げていくという、ボトムアップ型の情報処理の発想と方向性そのものが、GT 法の強みであり魅力だと、言うことができる。

そしてこの二つの視点を重ね合わせる中から、概念形成の重要な局面において目を見張るような概念化作用が見られる場合には、そこに、ボトムアップ型の情報処理の蓄積効果に支えられながら、と考えていいと思うが、結晶化的認識としてのアブダクションの論理が作動しているのであり、分析者としては、このことにもっと自覚的になっておくことが求められているということである。つまり、GT の分析的ポテンシャルはまさに《ボトムアップ+アブダクション》モードでの分析作業の進め方にこそあるのだ、というのが、ここでの主張なのである。より詳しく言えば、《素材を潜

り抜け、素材に晒され、素材からの刺激を受けながら、その過程で生み出されてくることのある大小の‘閃き’や‘思いつき’を大切にしながら、着目すべき概念群を見つけ出してくる》という基本姿勢でもって分析作業をやっていくことが提起されているのである。

最後に三つ目は、コード化枠組みの媒介的活用の仕方である。このコード化枠組み自体は、実は、素材群の可能性を‘殺いでしまう’ことも‘生かしていく’こともできるという両義的可能性を持っているものである。つまり、この枠組みは、一方で、特定の鑄型の中にはめ込んでいく道具として用いられる可能性を持っており、これはコード化枠組みのマニュアル的活用の仕方と呼ぶことができる。他方、素材群の位置づけや構造化を生み出していく際の媒介的視点として用いることもできる。そしてこの後者の観点からコード化枠組みの活用をしていくためには、‘ゆるやかな因果論’的特徴を持ったものとしてコード化枠組みを位置づける立場の堅持と、素材を潜り抜ける作業モードを基調としながらコード化諸契機の試行的活用に徹する姿勢、この二つが最低限必要とされている、ということである。

【注】

- 1) 本稿は第1回日本質的心理学大会・大会シンポジウム〔質的研究の方法論——KJ法とグラウンデッド・セオリー〕報告（2004年9月11日京都大学）として口頭発表した際の準備草稿に大幅に手を入れたものである。
- 2) Titscher（2000）でなされている、メジャーな分析手法としてのGT評価や、「GTは今日の社会諸科学において最も広範に採用されている解釈的戦略かもしれない」というDenzin & Lincoln（1994: p. 204; 2000: p.374; 2005: p.382; ちなみに、この評価・言い回しは、3冊のハンドブックですべて同じものである）での論評、さらにはAlvessonら（2000: p.13）での「1990年代〔以降〕、……Strauss and Corbin（1990）はベスト・セラーになっている」といった発言を参照のこと。
- 3) GT関連文献は膨大に存在するが、ここではそれらを次の4つのグループに分けて紹介しておく。
 - ① GT法関連の基本文献としては、Glaser & Strauss（1967）、Glaser（1978）、Strauss（1987）、Strauss & Corbin（1990; 1998）の5つをあげることができる。またCharmaz（2000; 2003; 2005）など、チャーマズの一連のGT関連論考にも注意されたい。
 - ② 社会調査論の分野である程度の詳しさをGTで紹介しているものとしては、Punch（1998）、Travers（2001）、Ezzy（2002）、Flick（2002）、Creswell（2003）、Bryman（2004）、Gray（2004）、Pidgeon & Henwood（2004）、Sarantakos（2005）など多数を挙げることができる。
 - ③ 日本でのGT関連文献では、佐藤（1992）、山田（1998）、森岡（1999; 2004）、木下（1999; 2003）、水野（2001; 2005）、山本ら（2002）、能智（2003; 2004a）、戈木（2003; 2005）、木下・萱間（2005）などが注目に値する。

GTの日本的展開との関連で、とりわけ看護系分野で注目を浴びつつある動きとしては、木下（2003）で提起されているM-GTAと戈木（2005）の業績が挙げられる。前者は、特に2作目の業績が概念化一本に絞り込んだそれなりのわかりやすさと、分析ワークシートの作成などの提案によって、か

なりの影響力を生み出しつつあるように思う（木下・萱間〔2005〕も参照のこと）。また、後者は、いわば GT（〈特性と次元〉）派としての側面を前面に出しながらオープン・コード化局面から選択コード化局面までの分析作業過程の全体をきちんと提示しているという意味で、見事な内容を持っており、看護界を中心にして一定の影響力を増してくる可能性を秘めているように思う。

④ GT 批判として注目すべきものとしては、本稿で若干の検討を加える Alvesson ら（2000）の他にも、Danermark ら（2002）、Layder（1993）らの議論がある。GT 批判のポイントに箇条書き的に触れている Bryman（2004: pp.406-408）をも参照のこと。

- 4) CM 法の概略を知る上では、さしあたり水野（1999）の前半部分と水野（2000）の序論を参照されたい。また CM 法での具体的分析内容に興味のある場合には、水野（2000）の本文部分に目を通すことをお勧めする。
 - 5) ここでは‘提示局面’を意識した上で‘分析局面’という言い方を用いている点に注意を促しておきたい。というのも、ぼく自身としては、素材群やデータ群との付き合い方に関しては、大きく分析局面と提示局面とをはっきりと区別しておく必要があるという立場にたっているからであり、しかも GT 法の場合には、この区別の意識が希薄なこともあって（もしかしたら、そもそもそういった発想自体をしていない可能性が高いと言った方がいいかもしれない）、この提示局面での議論の仕方や取り組み方に構造的な弱さ・甘さが見られるように考えているからである。なお水野（2001: pp.72-74）も参照のこと。
 - 6) この議論の出典は以下の個所である。《Grounded theory suffers from two problems: on the one hand, an unreflected view of data processing is advocated. Which brings with it a bias from pre-scientific categories of common-sense thinking; on the other hand, too much energy is spent on detailed coding operations.》（Alvesson ら〔2000: p.27〕）
 - 7) GT のコード化作業が‘退屈’なものとマイナスに評価されてしまうか、あるいは逆に何らかの意味でプラスに評価されることになるか、は、どういう分析作業イメージの中でコード化作業を行なうか、にかかっているように思う。ぼくの場合、後に本文で指摘する方向で——つまり、《ボトムアップ+アブダクション》モードでの分析作業という基本路線の下で——、またコード化枠組みを用いての素材群・データ群の構造化作業などとも連携させながら、そうした分析作業の一環としてコード化作業を行なうことにしていることもあって、‘膨大な素材群・データ群の中に分け入って行って、それらの多様な相貌との出会いが刺激になって引き起こされてくることのある、大小様々な《閃き》や《思いつき》を大切にしながら、予期していなかったような《宝物》を見つけ出してきたり、新しい《何か》を創り出してくる’というイメージなので、コード化作業の印象は‘退屈’どころではなく、非常に‘刺激的’なものである。
- コード化作業の‘質’を考える脈絡では、GT の手法に内在している——その典型は、比較・対比の手法である——、とぼくなどは考えている〈距離化の技法〉（‘distancing techniques’）として GT のメリットを前面に出してくる必要があるように思うが、本稿では、この点の詳しい話には踏み込まない。
- 8) 瑣末主義のワナについては水野（2005）を参照のこと。
 - 9) アルヴェッソンらは GT 的分析作業の仕方が「知られていることの再定式化」や「言い換え」にな

るという点を指摘することによってストレートに否定的な評価を下しているが、ぼく自身はこの点の評価は微妙ではないか、と考えている。つまり、そうした「知られていることの再定式化」や「言い換え」から始まって元の素材群レベルでの認識からの微妙なずれを含み込んだ形での抽象化の過程が、すでに知られていることを単に再確認するだけの些細な定式化に終わるのか、それとも理論構築局面で、より重要な意味のある定式化へと変貌していくことになるのか、という点については、その定式化の内容について個別的に判断するしかないものなのだから。

- 10) ここで注意しておきたいのは、アルヴェッソンらは、行為者レベルに非常に近いところで分析がなされると必然的に瑣末な知識の生産になってしまう、と主張しているわけではなく、あくまでもそうした可能性の余地があると指摘しているにすぎないという点である。行為者レベルに焦点化した分析のやり方に対するアルヴェッソンらの評価自体については、よくわからないが、そうしたやり方の評価は、(い) (そうしたミクロ分析に入るに先立って) なぜそうした焦点化が必要なのか、という点について明示的・意識的な位置づけや正当化の議論がなされているかどうか、(ろ) それらの議論がどの程度の説得力を持った形で展開されているのか、そしてまた (は) 実際の分析の仕方・切り込み方の内容そのものがどういうものか、こうした点に留意しながら、個別的に判断すべきものではないか、というのが、ぼくの見解である。
- 11) この議論脈絡では、ストラウス氏のコード化枠組みの他にも、例えば、《行為 (Act) ; 場面 (Scene) ; 行為者 (Agent) ; 媒体 (Agency) ; 目的 (Purpose)》という5つのキーワードに着目して縦横無尽に分析・解釈を行なっている Burke (1945) での議論の仕方や、ドキュメント分析のモデルとして Bertrand & Hughes (2005: p.155) に紹介されている S.Street という研究者の《タイプ (type) ; 著者 (authorship) ; 媒体 (agency) ; コンテキスト (context) ; インパクト (impact) ; 文書図式 (archival scheme) ; 解釈上の意義 (interpretive significance)》の枠組み (この文献は未見なので具体的なイメージは掴みえていないが) なども参考になるのではないかと考えている。
- 12) ボトム・アップ的情報処理とトップ・ダウン的情報処理については、池田・村田 (1991: pp.36-38) を参照のこと。
- 13) ここでは、日本疫学会編 (1996) の中に紹介されている疫学調査の具体例を使って統計学における帰納法的発想、つまり〈サンプルと母集団〉の発想を再確認しておこう。

例①は《P 県内の中学生女子の風疹抗体保有率を調査するために、200人を県内の50の中学から各4人ずつ選んで採血をした》(p.215) である。この場合、選ばれて調査 (採血) を受ける生徒が標本 (sample)、P 県内の中学生女子全員が母集団 (population) である。

例②は、《Q 県と R 県の血清コレステロール濃度を比較するために、両県の住民を200人ずつ選挙人名簿から無作為に選び出して採血をした》(p.215) というもの。この場合には、無作為に選び出してきた住民が標本、Q、R 両県の住民全体が母集団ということになる。

この二つの例で統計学的推測についての説明がなされているので、それを紹介しておくと、次のようになる。

「標本調査においては、標本は母集団の性質を反映していることを期待し、標本の性質から母集

団の性質を推測する。例①では、採血を受けた生徒の抗体保有率から P 県の女子中学生全体の抗体保有率を推測する。/例②では、選ばれた住民の血清コレステロール濃度を測定し、これを比較して Q, R 両県の住民全体の比較とする。もし、選ばれた住民のコレステロール濃度が高ければ、その県の住民全体の濃度が高いと推測される。このように、標本の性質から母集団の性質を推測することを統計学的推測という……」(p.216)

要するに、標本の性質から母集団の性質を推測することが、ここでのポイントであり、くいつかからすべてを」という、ここで採用されている推論の形式は、帰納法のそれ、とすることができる。

- 14) 重要なところなので、参考のために原文を載せておく。《Induction refers to the actions that lead to discovery of an hypothesis—that is, having a hunch or an idea, then converting it into an hypothesis and assessing whether it might provisionally work as at least a partial condition for a type of event, act, relationship, strategy, etc. Hypotheses are both provisional and conditional……》(pp.11-12)
- 15) なぜ、ばくの「議論にきわめて近い発言」という言い回しを使っているかと言えば、それは、本文での引用からもわかるように、ストラウス氏がアブダクションという言い方で注目しているのが仮説構築という局面における体験の決定的役割ということなのに対して、ばくの場合は、後に見るようにアブダクションに見られる結晶化的認識という側面なので、同じくアブダクションに注目すると言ってもこの用語に込めようとする意味合いが微妙に違っているからである。
- 16) 素材レベルと概念レベルとを結びつける・関連づけるという発想は、本文で触れている Lazarsfeld らの他にも、例えば C. Peirce のアブダクション論や、C. Ginzburg の徴候論、さらには S. Freud の症候論の発想や議論にも見られる。C. Peirce のアブダクション論については、その紹介論文を通して（いわば二番煎じで）以下で検討する。C. Ginzburg らの議論としては、Ginzburg (1989) を参照されたい（この論文の最後のあたりは、アンチ・クライマックスだが、その直前までは、なかなか刺激的な議論と言えるものである）。
- 17) Lazarsfeld ら (1955) の中の「セクション 1：諸概念と複合指標」への「序論」のうち、特に pp.15-6 を参照のこと。
- 18) Lazarsfeld ら (1955) の、より細かい議論は以下の通りである (pp.15-16)。彼らの場合、分析作業は 4 つの段階からなっている。第 1 段階は概念候補の創造、第 2 段階は（理論的）現象の入念な討議を通しての概念の特定化、第 3 段階は概念の調査研究設計への組み入れ、そして最後の第 4 段階は複合指標 (index) の構築となっている。

彼らが概念化プロセスに関してこういったイメージを前提にしているのかを知る上で重要なのは、第 1 段階である。そこで、その部分をより詳しく紹介しておけば次のようになる。

「第 1 ステップは、どちらかと言うとあいまいなイメージもしくは構築物 (construct) の創造のように思われる。このイメージは、その作り手が一つの理論的問題のあらゆる細かいところに沈潜するところから生み出されてくるものである。この創造的行為の始まりは、多くのばらばらの現象が何らかの基底的特徴を共有しているという知覚かもしれない。あるいは、作り手はある種の規

則性を観察したことがあって、その規則性を説明しようとしているということかもしれない。いずれにしても、その概念は、一度創造されると、何らかのあいまいに構想された実在 (conceived entity) となり、これのおかげで、観察された諸関係は意味のあるものとなるのである」(p.15)

ここで注目しておきたいのは次の2点である。一つは、彼らの場合、概念候補は理論的問題への沈潜から生まれてくるという発想が基本だということ。第2に、この沈潜局面で概念の作り手を刺激してくるのは、あくまである種の共通性や規則性の認識であって、(GTの場合のように) 素材群やデータ群との格闘や出会い、対話といったことはほとんど視野に入れられていないと見ていいようだ、ということである。

そのことは、第2段階として、素材群やデータ群とは関わりなく(理論的)現象の入念な討議を通しての概念の特定化作業が設定されていることから、また第3段階の概念の調査研究設計への組み入れという議論の関連で、この組み入れを媒介するものとして、‘(概念の)観察可能な諸指標’が登場してくるという議論の組み立て方からも見て取れる(ちなみに、諸指標には〈概念の‘部分’を構成するもの〉と〈概念からは独立したもの〉という2種類が想定されている)。なお、最後の第4段階で出てくる複合指標(an index)というのは、諸指標(indicators)についてなされた(複数の)観察を要約したもののことである。

- 19) (非常に魅力的ではあるが、ぼく自身の思考スタイルとは相当に異なっていることが明らかな) パースの主要な著作群と彼の思考スタイルを十分理解した上で彼のアブダクション論ときちんと向き合おうとするならば、予備的作業のために相当の時間が必要なることを痛感しているということもあって、本稿での議論は、残念ながら、パースのアブダクション論の全体像を把握しきった上でのものではなく、——後に〈3.4.3. アブダクションについてのぼくの立場〉というセクションで〈仮説的に提示される‘結晶化’的認識としてのアブダクションという把握〉として提示するべく自身の見解を除いて——何人かのパース研究者の業績を参考にさせてもらってなされている、いわば‘二番煎じ’の議論だという点をお断りしておかなければならない。その意味では本稿でのパースのアブダクション論の検討は、より本格的なパース論へのイントロ段階におけるぼくの仮説的議論の提示、という性格のものだ、と理解していただいていた方がいいだろう。
- 20) これらは直接的には‘仮説(hypothesis)’の例示である。ただし、この仮説的推論が(演繹や帰納との対比・関連で)アブダクションの位置を占めていることは明らかなということ(Houserら[1992: pp. 186-189])と、パース研究者である米盛氏もアブダクションの例として紹介しているので(米盛[1981: p.191]、本文ではアブダクションの例示として紹介する。なお、ぼくの個人的印象では、これらの例示は、それ自体としては、必ずしも興味深いものとは言いがたいのだが、彼の論理を理解する上では参考になるはずである。
- 21) 上山氏の場合には、KJ法の特徴づけの際にもこのアブダクションの論理の指摘が見られる点については、川喜田(1967: 4)を参照のこと。
- 22) Danermarkら(2002)のアブダクションの議論としては、本文で紹介した‘再コンテキストづけの論理’のほかに、‘論理的推論の一形式’の議論(→本文での第1のポイント)と‘知覚の一中心的要素

としての解釈=知覚の解釈的契機’としてのアブダクションの議論がある。

- 23) Danermark ら (2002) は「アブダクションとは、あるものについての着想からそれとは違った着想へ、もしかしたら、より発展しているかもしれないし、より深いものになっているかもしれない着想へと移行することである。これが起こるのは、問題の現象に関する元々のアイディアを、われわれが新たな一群のアイディアという枠組みの中で位置づけ解釈することを通してのことである」(p.91) と述べている。
- 24) 本文でアブダクションの論理の特徴として‘突然の全体認識にいたるという、この認識上の飛躍’という言い方をしたが、こうした把握の仕方がパース自身の考え方とかけ離れたものでないことについては、「アブダクションの論理としてのプラグマティズム」という論文の中での次のようなくだりを見てもらえば納得してもらえるはずである。つまり、「アブダクション的思いつき (The abductive suggestion) は閃き (a flash) のようにわれわれのところにやってくる。それは洞察の行為 (an act of insight) なのである (ただし、極端に誤りに陥りやすい洞察ではあるが)。」[洞察にいたる (←水野が挿入)] 以前に、仮説を構成する様々な諸要素がわれわれの心に存在していたことは事実である。しかしながら、われわれと一緒に束ねようなどとは夢想だにしていなかったことを束ねるという着想 (the idea of putting together)こそが、われわれの熟考=瞑想 (contemplation) を前にしてその新しい思いつきを閃かせるのである。」(the Peirce Edition Project: p.227)
- 25) 本文では GT と再コンテキストづけ論とは‘矛盾する’という表現を使ったが、このくだりは、‘矛盾する場合と、一見すると矛盾する場合とがある’という具合に定式化しておいた方が、両者の関連づけの仕方としては、より正確かもしれない。というのは、次のような場合を想定すれば、GT と再コンテキストづけ論とが接続される場合がありうるように思われるからである。つまり、GT の〈概念/指標〉モデルの観点との関連で言えば、分析をしている本人の意識には上っていないだけで、実は〈概念〉を保証する、より大きな解釈枠組としての‘何か’が、その分析者の発想の前提としてすでに存在している場合が想定しうるということ、しかもそうした場合の1つとして、〈パースペクティブとしての理論〉の存在を想定しうるからである。
- ここで、仮説形成と再コンテキストづけとの位置関係についても簡単に触れておこう。仮説形成としてのアブダクション理解の場合は、理論的枠組の存在を必ずしも前提しておらず、仮説が生み出されてくること自体に注目しているのに対して、〈再コンテキストづけとしてのアブダクション〉の方は、そうした枠組の存在を前提しており、この点——つまり、理論的枠組の存在を前提しているかどうかという点——に両者の違いがあるように思う。言い換えると、仮説形成としてのアブダクション理解の場合には、仮説が生み出されてくる回路が不問にされているのだから、(少なくとも分析者にとっては) 未知の理論的枠組の活用によるアブダクションの作動という場合を想定しうることになり、その意味では、仮説形成の1回路として再コンテキストづけが位置づくことがある、ということになるだろう。
- 26) 本稿の3.4.のセクション全体である程度の詳しさを論じてきた議論自体は、〈1. はじめに〉で触れておいたように、GT の分析的ポテンシャルを探り出すという、ばく個人の興味関心に引きつけ、またそうした興味関心に突き動かされる形で行なってきたものだが、GT の論理をアブダクション的推論の観点から位置づけた議論がすでにいくつか存在していることについても、触れておいた方がいいだろう。

それらは、Blaikie (1993) と能智 (2004b) である。とりわけ、Blaikie (1993) は、パースのアブダクション的推論についてある程度の詳しさを明示的に触れるとともに (pp.163-168)、GTをはっきりとアブダクション的調査研究戦略の一つ (an Abductive strategy) として位置づけている (pp.191-193)。

また「3章 仮説が生まれるとき」というセクションで、推論の三つの形式の一つとしてのアブダクションと、KJ法とアブダクションとの関連について丁寧な説明をした後にGTについての紹介を配置している山田 (1998: pp.51-75) の場合も、事実上、こうした研究系譜の発想に近いとみなしていいだろう。

さらに、Atkinson & Delamont (2005: p.833) は、GTは「膨大なフィールドデータの帰納的・過去遡及的点検を正当化する」議論として援用されがちであるが、そうした路線ではなく「発見的調査研究戦略 (heuristic strategies)」という議論脈絡の中でこそGTを位置づけるべきである、という議論を展開している。本論でのぼくの議論にここまでつきあっていただいた読者には、本稿での議論が、こうした Atkinson & Delamont (2005) の議論と共振しあっているものであることは明らかなはずである。

27) そういう方向での作業を、ぼくは (素材群やデータ群を相手にしながらの) ‘アイディアの風船飛ばし’ という形で表現することになっている。

28) Strauss & Corbin (1998) の場合、このコード化枠組みに相当するものは、‘パラダイム (the paradigm)’ と呼ばれ、「分析者たちが構造をプロセスと統合させていく際の手助けをするために考案された分析上の道具」(p.123) という定義が与えられている。このパラダイムの場合には、その基本的構成要素は《諸条件 (conditions); 諸行為/諸相互行為 (actions/interactions); 諸帰結 (consequences)》(p.128) の3つである。見られるように、ここでは行為と相互行為がセットで扱われている。恐らく行為連鎖への注目が、こうした定式化を生んでいるのだろうと想像するが (そして行為連鎖が生み出してくる独特の論理・メカニズムが存在すること、しかもそうした水準での出来事に注目すべきである、という点については異論がないが)、ぼくとしては、後に本文で触れる理由から、‘諸行為/諸相互行為’ のセットだけで行為主体並びに行為主体間の関連を議論するやり方には賛成しかねる。

ここで、Strauss & Corbin (1998: pp.181-199) で提起されている〈条件/帰結マトリックス (The Conditional/Consequential Matrix)〉についての見解を述べておく。コード化枠組みの活用の仕方についてのぼくのイメージについては本文を見ていただきたいが、そこでの書き方からも想像してもらえるのではないか、と思うが、条件/帰結マトリックスを実際の分析作業に動員してくると、‘何がグローバルレベルで何が国家レベルで何がコミュニティーレベルで何が組織レベルで’ 等等といった具合に、当て嵌めていく発想に入り込みやすい、という印象を持っている。このマトリックスの場合、着眼点があらかじめ細かく細分化されていることもあって、素材群やデータ群を相手にした分析作業に取り組む際の着眼点が形式的になりすぎる嫌いがある、という判断をしているので、ぼくとしては、このマトリックスは採用しない。ただし、本文でのコード化枠組みの説明からも明らかなように、分析作業の際に、例えばメゾ的契機やマクロ的契機などに注目すべきではない、と主張しようとしているのではないことは言うまでもない。

29) Jervis (1997) のシステム効果論には、この視点を随所に見出すことができる。

参考文献一覧：

- Alvesson, M. and Skoeldberg, K., 2000, "2 Data-oriented methods: empiricist techniques and procedures," in *Reflexive Methodology: New Vistas for Qualitative Research*, Sage, pp.12-51.
- Atkinson, P. and Delamont, S., 2005, "32. Analytic Perspectives," in Denzin, N. K. and Lincoln, Y. S. (eds.), *The Sage Handbook of Qualitative Research* (third Ed.), Sage, pp.821-840.
- Becker, S. and Bryman A. (eds.), 2004, *Understanding Research for Social Policy and Practice: Themes, Methods and Approaches*, The Policy Press.
- Bertrand, I. and Hughes, P., 2005, *Media Research Methods: Audiences, Institutions, Texts*, Palgrave Macmillan.
- Blaikie, N., 1993, *Approaches to Social Enquiry*, Polity Press.
- Bryman, A., 2004, *Social Research Methods* (second Ed.), Oxford University Press.
- Burawoy, M., et al., 1991, *Ethnography Unbound: Power and Resistance in the Modern Metropolis*, University of California Press.
- Burke, K., 1969 (1945), *A Grammar of Motives*, University of California Press.
- Charmaz, K., 2000, "19. Grounded Theory: Objectivist and Constructivist Methods," in Denzin, N. K. and Lincoln, Y. S. (eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd Ed.), Sage, pp.509-535.
- Charmaz, K., 2003, "15. Qualitative Interviewing and Grounded Theory Analysis," in Holstein, J. A. and Gubrium, J. F., *Inside Interviewing: New Lenses, New Concerns*, Sage, pp.311-330.
- Charmaz, K., 2005, "20. Grounded Theory in the 21st Century: Applications for Advancing Social Justice Studies," in Denzin, N. K. and Lincoln, Y. S. (eds.), *The Sage Handbook of Qualitative Research* (third Ed.), Sage, pp.507-535.
- Creswell, J. W., 2003, *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches* (second Ed.), Sage.
- Danermark, B. et al., 2002, *Explaining Society: Critical Realism in the Social Sciences*, Routledge.
- Denzin, N. K. and Lincoln, Y. S. (eds.), 1994, *Handbook of Qualitative Research* (first Ed.), Sage.
- Denzin, N. K. and Lincoln, Y. S. (eds.), 2000, *Handbook of Qualitative Research* (2nd Ed.), Sage.
- Denzin, N. K. and Lincoln, Y. S. (eds.), 2005, *The Sage Handbook of Qualitative Research* (third Ed.), Sage.
- Ezzy, D., 2002, *Qualitative Analysis: Practice and Innovation*, Routledge.
- Flick, U., 2002, *An Introduction to Qualitative Research* (second Ed.), Sage.
- Ginzburg, C., 1989, "Clues: Roots of an Evidential Paradigm," in *Clues, Myths, and the Historical Method*, The Johns Hopkins University Press, pp.96-125, pp.200-214.
- Glaser, B. G., 1978, *Theoretical Sensitivity*, The Sociology Press.
- Glaser B. G., and Strauss A. L., 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Aldine Publishing Company. 後藤・大出・水野訳, 1996, 『データ対話型理論の発見』,

新曜社。

Gomm, R., 2004, *Social Research Methodology: A Critical Introduction*, Palgrave Macmillan.

Gray, D. E., 2004, *Doing Research in the Real World*, Sage.

Houser, N., and Kloesel, C. (eds.), 1992, *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, Vol. 1 (1867-1893), Indiana University Press.

池田・村田, 1991, 『こころと社会』, 東京大学出版会。

Jervis, R., 1997, *System Effects: Complexity in Political and Social Life*, Princeton University Press.

上山春平, 1968, 『弁証法の系譜』, 未来社。

川喜田二郎, 1967, 『発想法』, 中公新書。

Kelle, U., 1994, *Empirisch begründete Theoriebildung: Zur Logik und Methodologie Interpretativer Sozialforschung*, Deutscher Studien Verlag.

木下康仁, 1999, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生——』, 弘文堂。

木下康仁, 2003, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い——』, 弘文堂。

木下康仁・萱間真美, 2005, 「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) について聴く」, 『看護研究』, 第38巻, 第5号, pp.3-21。

Lazarsfeld, P. F. and Rosenberg, M. (eds.), 1955, *The Language of Social Research: A Reader in the Methodology of Social Research*, The Free Press.

Layder, D., 1993, *New Strategies in Social Research: An Introduction and Guide*, Polity Press.

水野節夫, 1999, 「ドイツ在住のオトルコ女性の変容体験——自伝的語りのインタビューへの事例媒介的アプローチ——」, 『社会志林』(法政大学社会学部紀要), 第46巻, 第1号, pp.65-85。

水野節夫, 2000, 『事例分析への挑戦』, 東信堂。

水野節夫, 2001, 「GT ゲームにおけるオープン・コード化の作業について」, *Quality Nursing*, Vol.7, No. 11, pp.67-89。

水野節夫, 2005, 「〈二重のワナ〉と『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 第2版』」, 『看護研究』, 第38巻, 第4号, pp.65-69。

森岡崇, 1999, 「グラウンデッド・セオリーをめぐる」, A. L. ストラウス & J. コーバン (南裕子監訳), 『質的研究の基礎: グラウンデッド・セオリーの技法と手順』所収, 医学書院, pp.275-289。

森岡崇, 2004, 「〔解説〕グラウンデッド・セオリーがワクワクするのはなぜ?」, A. L. ストラウス & J. コーバン (操・森岡共訳), 『質的研究の基礎: グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順』(第2版)所収, 医学書院, pp.361-374。

日本疫学会編, 1996, 『疫学——基礎から学ぶために』, 南江堂。

西山悦子ら, 2005, 「質的研究におけるアブダクションを考える」(自主シンポジウム4), 『日本質的心理学会第2回大会アブストラクト集』(日本質的心理学会第2回大会準備委員会発行), pp.74-75。

能智正博, 2003, 「方法論セミナー: 質的研究におけるグラウンデッド・セオリー法の位置づけ」, 『人間性心理学研究』, Vol.21, pp.299-325。

能智正博, 2004a, 「グラウンデッド・セオリー法的分析の認知プロセス」, *Quality Nursing*, Vol.10, No.6,

pp.51-73。

能智正博, 2004b, 「質的データの分析——データの読みという視点から——」, 『児童心理学』(2004年版), 金子書房, pp.271-293。

The Peirce Edition Project (ed.), 1998, *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, Vol.2 (1893-1913), Indiana University Press.

Pidgeon, N. and Henwood, K., 2004, “28 Grounded Theory,” in Hardy M. and Bryman A., *Handbook of Data Analysis*, Sage, pp.625-648.

Punch, K. F., 1998, *Introduction to Social Research: Quantitative & Qualitative Approaches*, Sage.

戈木クレイグヒル滋子, 2003, 「質的研究を学ぶ意味」, *Quality Nursing*, Vol.9, No.7, pp.70-80.

戈木クレイグヒル滋子編, 2005, 『質的研究方法ゼミナール——グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ』, 医学書院。

Sarantakos, S., 2005, *Social Research* (third Ed.), Palgrave Macmillan.

佐藤郁哉, 1992, 『フィールドワーク』, 新曜社。

Strauss, A. L., 1987, *Qualitative Analysis for Social Scientists*, Cambridge University Press.

Strauss, A. L., 1993, *Continual Permutations of Action*, Aldine De Gruyter.

Strauss, A. and Corbin, J., 1990, *Basics of Qualitative Research*, Sage. 南裕子監訳, 1999, 『質的研究の基礎：グラウンデッド・セオリーの技法と手順』, 医学書院。

Strauss, A. and Corbin, J., 1998, *Basics of Qualitative Research* (2nd Ed.), Sage. 操・森岡共訳, 2005, 『質的研究の基礎：グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順』(第2版), 医学書院。

Titscher, S., et al., 2000, “6 Grounded Theory,” in *Methods of Text and Discourse Analysis*, Sage, pp. 74-89.

Travers, M., 2001, *Qualitative Research Through Case Studies*, Sage.

M. Weber, 1922, “Soziologische Grundbegriffe,” in *Wirtschaft und Gesellschaft*, J. C. B. Mohr. M. ヴェーバー著, 清水幾太郎訳, 1972, 『社会学の根本概念』, 岩波文庫。

Wengraf, T., 2001, *Qualitative Research Interviewing*, Sage.

山田一成, 1998, 「3章 仮説が生まれるとき」, 石川・佐藤・山田編, 『見えないものを見る力——社会調査という認識——』所収, pp.51-75。

山本・萱間・太田・大川, 2002, 『グラウンデッドセオリー法を用いた看護研究のプロセス』, 文光堂。

米盛裕二, 1981, 『パースの記号学』, 勁草書房。

* 本稿は、文部科学省科研費（課題番号：15530343）の助成を得たものです。記して感謝します。